読者の頁

隨想

ルンペン族

「一国民の9割強は一生良心を持たぬものである。」

イギリス風のリベラリスト河合栄次郎はかつてその著者の中で，「現在一世を風靡しているマルキストの9割強はルンペンマルキストである。」と言つた。この言葉は今もつて私の脳裡を不思議に離れない。時代が変ると共にリベラリスト，ミリタリスト，そして又終戦後のコミユニスト，テンノーイスト（一体天皇性云々というものが新聞や雑誌の大きなスペースを割くにたる問題であつたかどうか私は今でも疑問に思つている）アンチコミユニストと，何れの時代に於てもルンペン共の跳梁するのを私達は見てきた。戦争中は銭湯の中で，陸奥が大和が山本五十六がと口角泡をとばした八さん熊さんが，掌をかえしたように「よくもだましやがつた，東条の野郎が！」と又泡をとばしたのは単なる喜劇にすぎないが，ちつともだまされないのに右往左往した高級ルンペンは悲劇を演じ又演じつゝあるというべきだろう。まさに

「悲劇とは自ら恥づる所業をあえてしなければならぬことである。」から。　　（塵山生）

秋

くろがねの　秋の風鈴　鳴りにけり

寝られぬ晩夏夜あけのつめたさを昨日今日と思つている中に，秋は何時の間にか私達をつゝんでしまつた。小学校の読本が何かなつかしい季節である。朝，顔を洗うときの悲哀ににた気持，厳寒にもまさつて私達の反省を促すのもこの季節であろう。夜独り眼をさまして考えると，自分のしたことだけが自分を告発するのだとしみじみ思い当ることがある。がむしやらに故郷のおふくろがなつかしいのもこんなときである。

ふるさとは　つめたき土の　匂いして
　　こおろぎの鳴く　うす月夜かな

（感傷生）

談話室

広告について

土木学会誌の広告欄について甚だ突飛な考えであるが日頃の思いつきを述べさせて載きたい。会員諸士の中には都会地ばかりでなく，交通不便な土地に居住されている方も多いと思われる。老人で血圧の高さを心配される人もあろうし，長く病床に親しんでいられる方もあるだろう。近頃の新聞，雑誌などを開くとまず目につくのが売薬の広告であるが，果して効果ありや否や，甚だ疑問のものがある。薬と土木とは少々縁遠い話かも知れないが，会誌にも専門家による確認のある各種薬品の広告を登載したら如何だろう。保健衛生欄とでもいう欄を作つて半頁程この方に割いて載ければ結構だと考えている。勿論全会員数に対する薬品の利用率ということも考慮に入れなければならないが，宣伝にもなり会の雑収入の増加にもなるのではないかと考え一言する次第である。　　（正員　南信一）

広告雑感

毎月送られてくる会誌を手にしてまず感ずることは広告欄に対する工夫の不足である。毎月同じ広告ばかりが同じ場所におさまつていることは，まことに智慧のない話であつて，恐らく宣伝効果からいつても意味がないのではなかろうか。外の学術雑誌を見てもそれぞれみな変化をもたせる様努力しているし，時々非常に参考になる面白い広告に出くわす事がある。「土木建築設計施工　○○建設」とたゞ単に名前を並べるよりは，その会社が目下施工中の工事写真などをのせた方が，我々も参考になるし広告による宣伝効果も上るだろう。何も美的感覚などとむづかしいことは云わないが，内容が固いのであるから広告も固苦しいという論旨は成り立たないと思う。表紙の色刷りが出来ないのならば（外の学協会誌は殆ど全部が色刷である）せめて広告くらいもう少し企画性をもつてスマートなものにして載きたい。要は編集者のセンスの問題であり，広告ひとつにも編集技術が必要であると失礼をも顧みず申上げる次第である。妄言多謝　　（妄想生）

アメリカ便り

（宮森虎夫君第1信）

航路出発の予定が突然空路に変更となり，我々海外留学生一行は7月10日より相次で羽田空港発，或いは陸軍輸送機に或はパン・アメリカン会社旅客機に搭

乗，アラスカ，ウエーク，グワム＝ハワイの三経路をへて，12日頃より順次加州フエアフイールド空港に到着，オークランドのミルズ大学，バークレーの加州大学に分宿勢揃いをした上，陸軍及び国際教育協会（I.I.E.）代表者の指示を受けた。私は第2班 17名の一員として 11 日正午陸軍輸送機で羽田発，グワム，クワジャレイン，ジョンストン，ヒッカム（オアフ）を経由，14日正午加州に到着，オークランドのミルズ大学に入つた。

滞在中 ASCE 桑港地区書記長 R.D.Dewell 氏の好意に依りサンフランシスコ・オークランド湾橋を詳細に視察，相当量の資料を得ることが出来た。案内は管理責任者の Howard C. Wood 氏で州道路局湾橋管理事務所長の職に在り，自ら自動車を駆使して全長8哩の長橋をくまなく観察事務所で懇談した。特に興味深く感じた事は通行料徴集の機械化した方法と，維持管理のため機械力，機動力を応用し此の長橋を一司令所で完全に把握しているとの事である。開通14年，7 900万ドルの工事費は遠からずこの通行料により償却，以後は無償で通行を許可し維持費は州費より支辨の由，両氏ともこの遠来の客に真に親切叮嚀でお蔭で大いに学ぶことが出来た。尚金門橋は都合上視察出来なかつた。

学生全員は10班くらいに分れ各地で夏期特別講座に出席，9月にそれぞれ所定の大学に入学するが，入学先の決定，費用の配分等は米国政府のため New York の国際教育協会（I.I.E.）が代行している。元来我々の身柄は米国政府給費学生で1ケ年間の費用を支給され，その後帰国して母国の文化，教育，科学技術の発達に貢献すると言うことになつている。

7月22日デンヴアー行25名はオークランドを南太平洋鉄道会社のシカゴ行列車で出発，ネヴアダ，ユタ，ワイオミングの各州を経て翌日夜コロラド州首都のデンヴアーに到着，直ちにデンヴアー大学の学生アパートに入り翌日から南米，欧州の学生とともに語学特別講座に出席中である。

デンヴアーは人口 130万位，ロツキー諸州随一の都会で西北方 15 哩にロツキー連峯を望見する高原に位し，夏は相当暑いが湿度が低いので割合凌ぎ易い様子である。市街は公園緑地多く従つて住宅地はロス密度低く都心部は商店会社が集中，公共交通機関はトロリーバスでデンヴアー大学と都心部は 6哩，25 分くらいである。因に学生アパートは構内にあり，鉄筋コンクリート3階建で数棟あり，有家族者，単独身者が雑居，居間，寝室（2室），浴室，電気冷蔵庫のある小台所と設備の良い単位が各階にあり，我々留学生は5名で一単位を占め週日は大学食堂を利用，土，日の休日は予め食料品店で買つておいた材料で自炊，といつても日本のホテルの定食位の物は 15 分位で出来，後始末も5分位で出来という真に便利で合理的な生活が出来る。

連邦政府直属機関で西部17州を河川統制，水力開発を根底とし綜合開発を計画実施しつゝある Bureauof Reclamation は日本の土木界でも周知の機関であるが，その現業総本部はデンヴアー北郊にあり 10 日程前に一同と見学したが，大規模な水理構造物，模型実験，巨大な機料強度試験機，コンクリート水蒸気養生設備建設材料，分析試験室等何れも注目に値するものであると思つた。近日私だけが特に本事務所につき事業内容を詳細に研究する様デンヴアー大学に交渉中である。本機関に関する記事は何れ次の機会に取まとめて報告したい考えである。

（コロラド州デンヴアー大学にて　宮森虎夫）

新刊紹介

日笠育夫著　高水工学

A5，167頁，森北出版株式会社，25.7.25.発行，250円

著者の序文に，この本を書かれるのに当つて特に注意された点が次の様にあげてある。a. 水源から河口まで，洪水防禦に関して，統一した一貫性をもたすこと。b. 洪水防禦の根本をなす最大洪水量に関し詳述すること。c. 河川改修に理論的根本方針を與えること。d. 洪水排出，維持保全のため河口川幅の撰定に関し詳述すること。e. 在來とかく軽視されていた可動ぜきに関し，これを系統立てかつ詳述すること。f. 治水工事においては経験が重要な役割をなすので，実例を多く記述すること。g. 記述を極力簡明にすること。

最初の37ページに降水流量に関する記述があつて，洪水流量を降水量や流域の特性などから求める事に関してアメリカの最近の例があげてあるのが目立つ。しかし水文学的な観測値の統計学的な取扱い方についての最近の方法について全くふれてないのは残念である。日本の洪水については，利根川について説明があり，カスリン台風による洪水など新しいものがあげてある。洪水の運動についての新しい議論の説明はない。

次の約4分の1には山復工事に関する記述があり，砂防ダムについて詳しいようである。更に18頁ばかりが洪水防禦の方法——洪水を速く流すか，一時貯えて遅らせるか，分流させるか——に関してあてられている。実例として利根川の昭和14年及び23年の計画があげてある。

後半は堤防，護岸，水制，床固めなどの工作物の設計に関する事，河口改良工事，可動ぜきに関するやや詳しい記述がある。（井口昌平）

（41頁へ）